

## 「長州ファイブ 山尾庸三(やまお ようぞう)の先見性」(No.11)

前回、先に在英日本国大使館で開催された『維新 150 周年記念国際シンポジウム』の際に後輩から教わった話をご紹介します。復習しますと、『日本は、運よく南北戦争があったので列強による侵略と植民地化を免れた』と言う話でした。

このシンポジウムの基調演説は、山大の林裕子特命教授による『SDG's (エス・ディー・ジーズ。Sustainable Development Goals。持続可能な開発目標) 達成に貢献する人材育成』で、その副題は『長州ファイブ 山尾庸三(やまお ようぞう)からの学び』でした。

今日は、その基調演説から『山尾庸三(やまお ようぞう)の先見性』についてご紹介し、私の雑感を付け加えてお話しします。

第一は、技術立国に対する先見性です。

その当時山尾は、外国船を見た時、日本は単に船を買うだけでなく、この様な素晴らしい船を開発製造できる国にならなければと考えたそうです。そこで、山尾は、長州ファイブとしてUCLでの勉強は政治や経済でなく、

化学を履修したそうです。その成績は化学で4位、解析化学で4位で優秀でした。帰国後、海外からの先端技術を教えるために、反対を押し切って、日本最初の実務技術者養成機関である「工学校」を設立しました。この工学校は、1876年に「工部大学校」と改められ、後の「東京大学工学部」の前身となったそうです。

また、山尾庸三(やまお ようぞう)の孫である和田小六は、東京航空学研究所の所長や東京工業大学の学長として、航空学のエンジニア育成に貢献しました。ひ孫の和田昭允(わだ あきよし)は東大の名誉教授です。彼は、ヒトゲノム研究者で、ノーベル賞受賞者の小柴教授と共に、横浜サイティア高校の設立者の一人です。この高校は文部科学省によりスーパーサイエンス・スクール、スーパーグローバル・ハイスクールに指定されています。山尾庸三(やまお ようぞう)は、日本の技術立国に関する初めての推進者と言えると思います。

第二の先見性は、インクルージョン(誰も取り残さない)です。

山尾は造船技術を学ぶためにグラスゴーに行きました。彼は聾啞(ろうあ)者が障害の無い人達と平等に働いているのを見て驚きました。造船所では、大きな音が響き渡り、労働者は言葉ではなく、手話や指でアルファベットを作ることで会話をしていました。彼は聾啞者が、大きな自信を持つ

て働きながら自身の文化や社会を創っている事を知りました。

イギリスから帰国後山尾は、1880年に盲学校を設立しました。山尾は、『障害者が教育を通じて自立する教育観』を確立しました。この学校は現在筑波大学に属しています。

ここで、重要な考え方は、障害者やマイノリティーに対し、単に助けたり、ボランティアをするのではなく、『共に対等、且つ平等に生きることを目指し、ディーセント・ワーク(Decent work、働きがいのある人間らしい仕事)を推進している事』です。

第三の先見性は、学際的アプローチ(特にインダストリアル・デザイン)。

山尾は、1876年に工部美術学校を開校しました。日本で最初の官立美術学校でした。山尾は工業化には、単に量産及び低コストだけでなく、美的感性が必要であると認識していました。画学と彫刻の学科を作り、イタリアから画家、彫刻家、建築家を先生として招聘しました。彼の考え方は先進過ぎて、学校は7年で閉校を強いられました。しかし、この考え方は、STEM(Science, Technology, Engineering and Mathematics、[科学・技術・工学・数学](#)の教育分野の総称、理系)教育に創造性や視覚的学習を取り入れる、インダストリアル・デザイン(industrial design、「工業デザイン」または「工業意匠」)導入の先駆けとも言えます。

通常、先見性のあり無しは、結果論で評価されますが、私は、『以下の4つの過程に対する“能力と努力”』だと考えました。その過程とは、**洞察力**(観察力・情報収集力、問題点の認識力・理解力・把握力)、**創造力**(理想・在るべき姿(ターゲット)に対する創造力、問題・課題想定力)、**企画力**(計画・企画力、マイルストーンを作る、実行計画・アクションプラン立案)、そして**実施・実行努力**(対策・対応・準備する、挑戦・チャレンジ・実践する、アプローチ) であります。その順番は『洞察→創造→企画→実行・実施』又は『創造→洞察→企画→実施・実行』(過去は参考情報)の2通りがあると思います。いずれにしても『**実施・実行しない**』と意味がなし、リスクが伴う。これを避けると、単なるアイデア・思い付き又は非難・ボヤキになってしまう恐れがあります。

これからは、蛇足ですが、私の大学時代、当時の工学部としては先進的な取り組みとして、インダストリアル・デザイン講座が始まり、電話ボックスを調べ、レポートを提出したことを思い出しました。また、その時の講師が、東京芸術大学を卒業間もない従兄の曾根靖史で、講座選択を頼まれ選択した事を思い出しました。更に、彼が学生時代に自宅で絵の塾を開くことになり、近所に従兄は沢山居ましたが、叔母の好意か、お節介か、何故か一番不向きな私が数合わせの生徒として参加させられたことも思

い出し、歳の責か、なつかしさが込み上げてきました。また、私の低い美的感覚を此処まで高めてもらった事に心から感謝、感謝！！。

これで、会長の時間を終わります。

## 覚書

- 曾根根靖史(やすみ)(85才)従兄。(妻 曾根眞佐子、靖史と同級)  
GKインダストリアル・デザイン研究所の設立に参加  
(現)株式会社 GK デザイン機構の GK ショップ副支配人  
GK はヤマハオートバイ(スーパーカブ)の第 1 号機のデザインをした  
ことで有名。  
元近畿大九州工学部(現近畿大学産業理工学部)長  
「I LOVE遠賀川」(飯塚市)の実行委員会 前実行委員長
- MDGs :Sustainable Development Goals
- MDGs:ミレニアム開発目標(Millennium Development Goals)